

アジア言語地図の「太陽」と日本語方言学

福嶋 秩子 ふくしま ちつこ / 新潟県立大学、AA研共同研究員

言語地図を読み解く言語地理学の手法を用いた研究を紹介する。
アジア言語地図 (*Linguistic Atlas of Asia*) の最初の項目「太陽」の地図と
日本語における「太陽」の方言地図から、どんなことがわかるのだろうか。

言語地理学との出会い

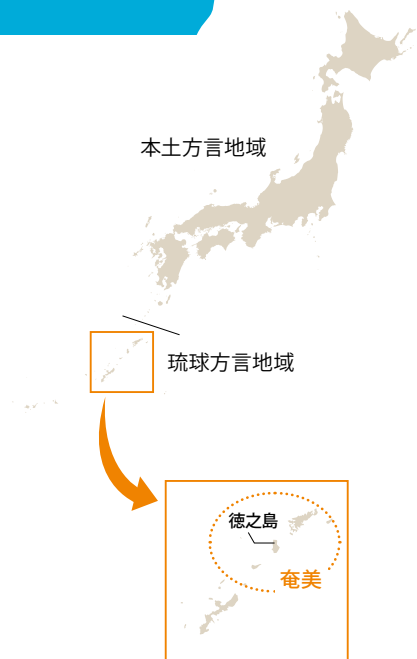
言語地理学とは、一定の方針の下に集められた言語データを地図上に表し、その分布からその地域のことばの歴史を明らかにするという学問である。私がこの学問と出会ったのは、大学3年の時だった。この分野の方法論的基礎を固めた『言語地理学の方法』の著者、柴田武先生のご指導のもと、岩手県栗石での方言調査に参加することとなったのである。たくさん話者から聞き取った別々の情報を一枚の地図に表して

みると、思いがけない分布が現れる。それをどう解釈するかは、悩ましくもワクワクする体験だった。2年後に今度は奄美徳之島での調査に参加し、翌年には調査のリーダーを任せられた。修士論文で『中国地方五県言語地図』所収の言語地図を分析し、その発展として、博士課程のときに出雲方言と山陽方言の境界地帯で調査を行った。その後、全国調査の一部を担当したりしながら、現在居住している新潟県や奄美徳之島を中心として、様々な言語地図を描いてきた。分布を吟味し、解釈をうまく表す地図を作成することは、課題であるとともに楽しみとなっている。

アジア言語地図の最初の項目「太陽」のまとめを担当したので、この項目を例にしてことばの多様性の研究の一端をご紹介したい。

アジア言語地図における「太陽」

日本語と韓国語はともに中国語から漢字を取り入れ、語彙のなかに漢語が多数含まれるという共通点がある。日本語の「太陽」を表すことばには、もともとあったことば(固有語=和語)である「ひ(日)」の他に、漢語として「太陽・天道・日輪(にちりん)・日天(にってん)・今日(こんにち)」がある。さらに、太陽を擬人化した「おひさま・おてんと(天道)さま・にちりんさ



ま」などの敬称が付いた複合語がある。韓国語にも、固有語のhe、漢語のthejan(太陽)、敬称付きの複合語henimがある。また、中国語を見ると、単一語のri(日)、複合語のtaiyang(太陽)、擬人化した「公・帝・爺・婆」の付いた語の他、「菩薩・仏」が付いた形式があるなど、類似のパターンが見られる。いずれも太陽信仰を反映すると考えられる。一方、「神」を表す語が含まれる例がアイヌ語やオーストロアジア語族など周辺の地域に、神の名が使われる例がイラン語派にある(図1)。

ヨーロッパ言語地図 (*Atlas Linguarum Europae*: 1983年から刊行中)の最初の項目「太陽」が、アジア言語地図でも最初の項目として選ばれた。「太陽」の項目では、両地図で共通して、意味する対象が拡大していることが見て取れる。「太陽」を表す語が、時の単位である「一日」や「昼」、「日光」などの意味を持つようになるのである。日



徳之島の海。



徳之島の闘牛。

*写真はすべて岡村耕吉氏提供。



図1 「太陽」敬称(アジア言語地図)



リュウキュウアカショウビン(カワセミ科)。



アダン(タコノキ科)。

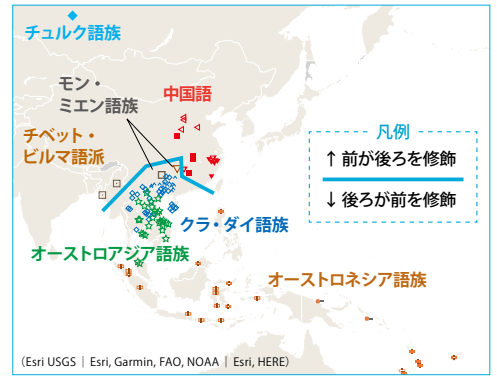


図2 「太陽」類の語構成パターン(アジア言語地図)

本語でも、「太陽」を意味する「ひ」は、「一日」や「昼」、「日光」の意味ももっている(例：日が経つ、日が長い、日が差す)。さらに、「ひる(昼)」という語の一部となっている。中国語でも、riは「一日」という意味で使われている。

アジア言語地図で見られる、もう一つの興味深い現象は、よく似た語構成パターンの連続分布である。インドネシア語で「太陽」のことをmata hariという。これは「目+日」という語構成パターンで、後ろが前を修飾している。先に述べた意味の拡張で多義語になったのを補正するために、このような複合語の生成が促された可能性がある。「目+日、目+空、目+神、ランプ+日」のような類似するパターンが、東南アジアを中心に分布するオーストロネシア語族、オーストロアジア語族、クラ・ダイ語族などに見られる。一方、中国語やチベット・ビルマ語派、さらに離れたチュルク語族には、前が後ろを修飾する「日+目、日+孔(あな)」のようなパターンがある。(チュルク語族を除き)両者の分布は連続している(図2)。

日本語の方言における「太陽」

『日本国語大辞典』第二版には、方言も使われている地名とともに記されている。「太陽」を表す語の方言についてArcGIS Onlineを用いてその地図化を試みた(図3)。地図化したのは「ひ・天道・日輪・日天・今日」とその派生語である。「太陽」という語は書き言葉として認識されているので、方言としては出てこない。

日琉祖語から日本語と琉球語が分岐したという言い方もできるが、ここでは方言学の枠組みでとらえると、日本語の方言は本土方言と琉球方言に二分できる。琉球方言は、鹿児島県の奄美大島以南の奄美群島と沖縄県に分布する。かつての琉球王国の領域である。「太陽」の方言地図でも、本土と琉球の違いが明瞭に現れる。

「ひ」は、シ・シュ・フなどの訛りがある場合もあるが、「おひさま」の他、「おひさん・ひさま・ひさん・ひどん」やその変種が本土側を中心に分布する。沖縄県国頭郡には「おひ」に対応する「うふい」がある。本土方言の-oが琉球方言では-uとなる対応の結果である。

「天道」は、本土方言ではほぼ「てんと・てんとう」となっているが、熊本に「おてんど(う)さま」がある。「(お)てんと(う)さま/さん/はん」と多くは敬称である。「てんと(う)」の本土方言での分布は連続的でなく、伊豆三宅島や奄美にもあることに注意したい(なお、地図に示していないが、八丈島で「てんとうさん」は「月」を意味するそうである)。琉球方言では「ていだ」とその変種の「ていだん・ていら・した・しな」が分布する。これらの語が「天道」に由来するかどうか、かつて議論があったが、今は「天道」由来で決着している(『日本国語大辞典』でもそう扱っている)。「ていだ」の系統が古くに琉球に入り、その後本土系の「ていんとう」が伝わって奄美の喜界島・徳之島・沖永良部島で使われるようになったと考えられる。

「日天・日輪・今日」は「天道」に比べて新しいと考えられ、かつて都があった関西を中心にそれぞれ広がっていったような分布を示している。なお、『日本国語大辞典』によれば、「今日」は、今日われわれを照らす太陽の意である「こんにちの天道さま」に由来するようだ。「こんにち」だけの使用例はなく、「天道・日天・日輪」と異なり、必ず敬称とともに使われる。

全体として、「ひ」が古く、その後に「天道」が広がり、「日天・日輪・今日」が続いたと考えられる。また、太陽信仰から、敬称の付いた語が広く使われていることがわかる。

奄美のことばと文化

鹿児島県のトカラ列島と奄美群島の間で

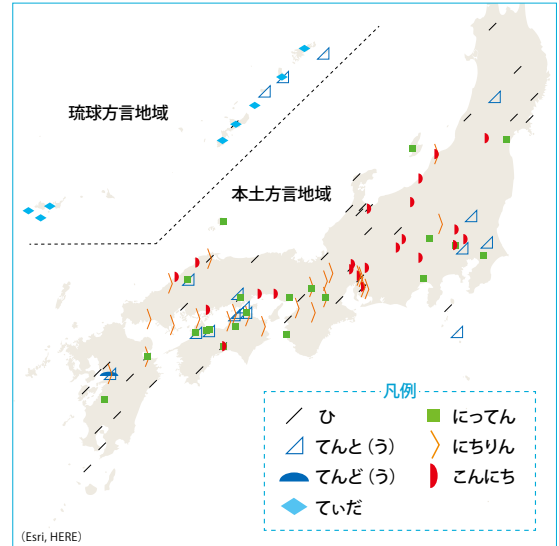


図3 「太陽」の方言(『日本国語大辞典』第二版)

方言の境界線がひかれ、それ以南で琉球方言が話されている。この琉球方言地域は琉球文化圏でもある。たとえば、妹が兄を守護すると信じるウナリ神信仰のある社会である。しかし、奄美は沖縄と同じではない。琉球王国の支配を受ける前の奄美世の時代、琉球王国の支配を受けた那覇世の時代、17世紀初頭の薩摩の琉球侵攻後の薩摩藩による支配の時代と、複雑な歴史をもっている。そうした中で本土と沖縄の両方から影響を受け、音楽などでも独特の文化が育まれている。

学生時代に奄美徳之島を初めて訪れてその方言に興味をもち、初めは語彙の聞きとり、後には文法の研究のため、中断期間はあるものの何度も島に行った。地元の方言研究者たちとの共同研究で徳之島方言辞典を作成し、島の方言地図を何枚も作った。たとえば、起源の異なる親族名称が何層にも重なりあうことを示す地図や、動詞のラ行五段化という活用体系の変化の過程がかいまみられる動詞の連用形や禁止形の分布図を描いた。けれどもまだまだわからないことがある。あともう少し、島のことばの探求を続けたいと思っている。

